研究

ウイリアム・ペティの経済理論（上）

——市民革命経済理論の形成——

稲村　勲

目次

Ⅰ　問題提起
Ⅱ　ペティ経済理論の原像（以上本号）
Ⅲ　『租税貢納論』段階における経済理論
Ⅳ　『政治算術』『アイアランドの政治的解剖』段階における経済理論
Ⅴ　『貨幣小論』段階におけるペティ経済理論の確立
Ⅵ　ペティ経済理論の総体的把握とその性格

Ⅰ　問題提起

一

資本主義的蓄積構造の成立を産業革命の開始期に——その理論的表現をアダム・スミスに——おくとすれば、それに先んずる時期は、原始蓄積期——いわゆる重商主義的段階——といえる。ところで、この原始蓄積期——一六世紀後半～一八世紀半ば頃——は単なる量的発展過程として把握することはできないであろう。事実歴史のこの段階は、市民革命—ピ

ューリタン革命――を転回軸として内包することによって展開されているのである。

従来のイギリス「重商主義」に関する諸研究においても、この段階への市民革命の内在化、転回軸としての市民革命の位置付けが、次第に不可欠の視角として主張されて来ている。日本におけるその代表的見解を、われわれは、大塚史学をふまえた一連の諸研究の中にみることができる。その要点は次のようなものである。

「重商主義」段階は、市民革命（とりわけ名誉革命）によって、「絶対主義的重商主義」（前期的商業資本主体）段階と「本来の（固有の）重商主義」（初期産業資本主体）段階とに区分される。そして初期産業資本を政策主体とする「本来の重商主義」段階こそ、原始蓄積が「積極的」に推進される段階である。(1)

しかしながら、このような歴史過程に対する市民革命の内在的・転回軸的位置づけに比して、理論史においては、市民革命の内在的設定が必ずしもなされているとはいえないように思われる。この点について、われわれは、小林昇氏の見解をみてみよう。

小林氏の見解の要点は次のようなものである。

小林氏は、まず「理論の構造と歴史（政策史をふくむ）の構造とは同質ではなく、前者は後者の単なる反映ではない」(2)として、両者の区別面を強調され、この段階――いわゆる重商主義段階――の経済諸理論を「原始蓄積期の経済諸理論」と規定される。そして「原始蓄積期の経済諸理論」の再構成にかんして次のようにいわれる。――「経済理論ないし経済思想としての本来の重商主義のばあいには、事情はもっと複雑である。むろん、ここにも新旧両勢力の対立・抗争は表現されており、その識別は大切であるが、そのほかになお、理論ないし思想が個人の意識をつうじてきわめて個性的に形成されるという特質がある。そうしてこの特質はここでは次の結果を生むであろう。第一、すでに知るように、原始蓄積の過程そのものは絶対主義の内部で進行を開始しているから、この過程を推進させる方向をもつ理論や思想も、いちはやく絶対主義のもとで生まれており、したがって、原始蓄積期の経済諸理論を体系的に分析し構成しようとする場合、それらは当然に対象の一環となる。第二、しかし、変動期の社会に生まれて生活をつづけた諸個人の理論ないし思想は、ここでは理論と思想との複雑な関係に立ち入る余裕はないけれども、

それ自体としても矛盾にみち、変貌が著しい。だからわれわれは、原始蓄積の理論的推進力となったとされる人々のなかからも、旧い要素を摘出して区別し、これと逆の立場にあった人々のなかからも、新しい要素を発見してこれに正当な評価を与え、こうしたうえで、本来の重商主義の理論体系を再構築しなくてはならない」。(3) ――要するに小林氏は「原始蓄積期の経済諸理論」の特徴を、新旧諸要素の交錯として把握され、その二つの要素――原始蓄積の理論的推進力である新要素とそれを阻止する力である旧要素と――をそれぞれの理論に内在しながら識別してゆくことによって、「本来の重商主義の理論体系」を再構成しうるし、すべきであると主張されているといえよう。

しかし、このような小林氏の見解をみるとき、われわれは、先述した市民革命と理論史との関係についての疑問をやはり強く感じるのである。

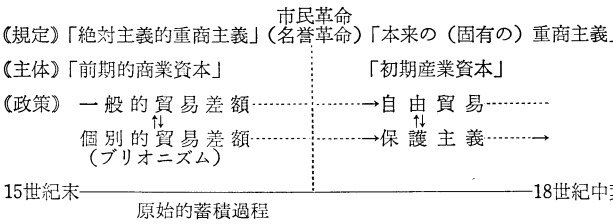
すなわち、小林氏の見解では、理論史は新旧諸要素の交錯した原始蓄積期の経済諸理論の量的展開過程に基本的には解消されてしまい、理論史がそれ自身の展開の中に、歴史の発展的構造がもったような転回軸を内在せしめないことになっていると思われるのである。たしかに、理論史は歴史の「単なる反映」ではなく、一定の独自性――相対的独自性――を有するものとして展開される。しかしながら、理論史の独自の展開は、その独自な展開それ自身の中に市民革命を内在化せしめつつ展開されてきたと考えられないであろうか。すなわち、いわゆる重商主義段階――原始蓄積期――の理論史は、それ自身市民革命の経済理論――それまでの理論史を新たな質において統一する契機をなす理論――を生みだすことを通してのみ展開されたのではなかろうか。そして「いわゆる重商主義」段階の理論史が、このように市民革命の経済理論を一種の転回軸的位置において内在させて展開されてゆくものであることによって、それは次に産業革命の経済理論――アダム・スミス――によって止揚されそれ以後の展開へとつながってゆく――非連続の連続とでもいえる展開――と考えられないであろうか。

この小論は、このような問題意識を理論的に基礎づけるための準備的試論の一つである。

(1) このような見解は、大塚史学を基礎として一主流を形づくって来ている。その基本的構造をセェマティッシュに示せば

左記のような関係にあるといえよう。『大塚久雄著作集』、岩波書店。小林昇『原始蓄積期の経済諸理論』未来社、一九六五年、関口尚志「原始蓄積と経済政策」『経済政策講座』(1)有斐閣、一九六四年、所収。

このような把握に対して従来から異論・批判が提示されてきたのであるが、その主要な批判の視角は三つに集約出来よう。第一の視角は白杉庄一郎氏によって示されたものである。すなわち市民革命（名誉革命）は「中世的ギルド的商業資本」から「近代的商業資本」への主体転換をもたらしたものであり、したがってまた市民革命は商業資本の指導下になされ、産業資本はいまだ商業資本に「従属」する形で存在していたとする。こうした立場に立つかぎりで、市民革命をはさんでの前後の連続性の面が強論される。「名誉革命と商業ブルジョアジー」『彦根論叢』一九号、「名誉革命以後のイギリス重商主義」『彦根論叢』二一号参照。

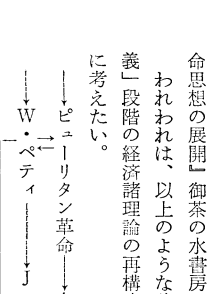


第二の視角は出口勇蔵氏の批判である。出口勇蔵氏は、そもそも「固有の」あるいは「本来の」という呼称自体、固有でない重商主義といったものを前提することになるとして疑問を提示される。そして更に小林昇氏等の見解における「絶対主義的重商主義」の評価にたいしても、「絶対主義を近代的なもの」として再評価すべきことを強調される。そして氏の積極的視角として「royal mercantilism から parliamentary mercantilism に移行する運動」を「werdenの過程」として含むような重商主義論の必要を強調される。「『その意欲だにあらばオーストリアは万国を凌がん』―ヘルニク研究序説―」『立命館経済学』第十一巻・第二号参照。

第三の視角は羽鳥卓也氏において示されるものである。羽鳥氏は「市民革命を推進し、革命政権の樹立に理論的基礎づけを与えた思想（市民革命思想）がいかなる理論構造のものであり、ここに含まれた論理がそれ以後の歴史のなかでいかなる内容の思想によって批判克服されるにいたったか」という視点から、市民革命思想という次元で評価すべきことを強調される。そして、小林昇氏等に対しては、市民革命後の政策主体は国外市場に結びついた特定の独占的産業資本であったこと、また小林説では産業革命を原始蓄積の延長線上に量的過程性において結びつけることになり、産業革命の意味が解消されてしまうことなどの点から批判された。「アダム・スミスと重商主義」『商学論集』第三十三巻第一号、『市民革

命思想の展開』御茶の水書房一九五七年、参照。

われわれは、以上のような諸見解の検討を通して「重商主義」段階の経済諸理論の再構成の全体的見通しを、次のように考えたい。



(2) 『経済学史講座』(1) 二六ページ。

(3) 前掲書、二六〜二七ページ。

二

われわれは以上のような問題意識を理論的に基礎づける作業の一環として、市民革命の端緒としてのピューリタン革命の経済理論を、ウイリアム・ペティの経済理論のうちに想定し、解明してゆく。

まず、従来のペティ経済理論に関する特徴的諸研究の整理からはじめよう。

① ペティが新たな段階における「重商主義者」として「純化」してゆくという評価。――とりわけ『租税貢納論』において経済現象の本質に迫ってゆこうとする面をもつかぎりで重商主義批判の側面をもっていたペティが、『政治算術』においては、新たな段階での「重商主義者」として「純化」していったとする白杉庄一郎氏。(4)

②重商主義的側面と古典派的側面との「混在」という評価。――マルクスのペティ評価(5)をふまえつつ、いまだ「商業資本の支配・指導のもとにようやく発展しつつあった産業資本」の立場を表現するものとして、富把握においても価値把握においても、重商主義的側面(富増進=貨幣蓄蔵、価値=銀貨幣)と英国古典派的側面(富=生産物一般、労働による価値規定)とが「混在」しているとする。渡辺輝雄氏。(6)

③市民革命=ピューリタン革命に内在せしめる評価。――「著者その人をその時代の社会に位置づける」という視点から、ペティの経済理論というよりも、なによりもペティそのひとを、ピューリタン革命の時代に生き、それを背影とし、かつそれに即してのみ理論形成しえたものととらえてピューリタン革命下の諸実践の理論的・方法的結実こそが「政治算術=解剖」であったとする。そして彼の理論における産業資本の立場を強調する松川七郎氏。(7)

以上従来のペティ経済理論研究の代表的方向を三者の研究において整理してきたのであるが、これらの諸研究にたいし

てわれわれは次のような問題を感じる。

第一に、ペティ経済理論を、とりわけ労働価値説の生成過程との関連で部分的にとり出し評価する方向から、ペティ経済理論の全体像を把握しようとする方向へと、視角の拡大・深化がなされてきていることは評価すべきことである。しかし従来の諸研究においては、ほぼ共通した分析視角上の問題が存在する。すなわち、ペティ経済理論を〝重商主義的側面〟〝古典学派的側面〟という二面を基準として分析・評価してゆこうとする視点がそれである。

たとえば白杉氏は、この視点を『租税貢納論』と『政治算術』との関係にあてはめ、古典学派的側面の部分的存在から重商主義的側面への「純化」として評価される。また渡辺氏は、全体を通しての「混在」を強調される。しかしながら、ペティ経済理論を全体的に把握するためには、従来の諸研究が二つの側面として識別していったときにその基礎とした、ペティにおける二つの側面――流通世界と生産世界、（交換）価値と使用価値等――が有機的に関連して構成する独自の統一性をこそ明らかにしなければならないのではないか。

第二に、第一の問題と関連して、ペティ経済理論を彼自身の著作の展開過程にそくして総体的に把握する上での問題である。

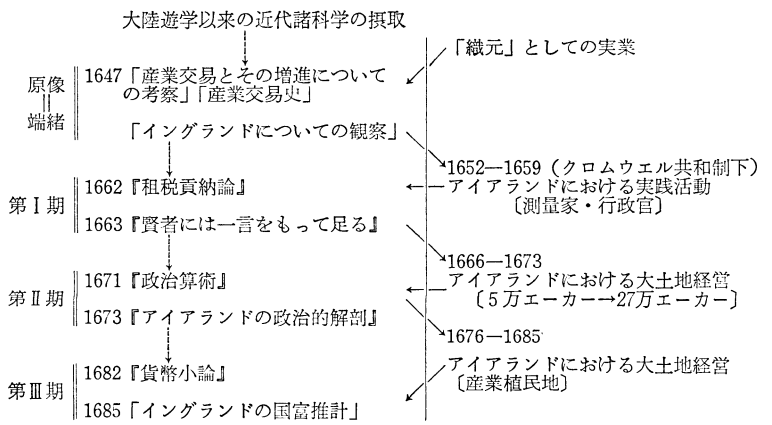
白杉氏にあっては、『租税貢納論』＝古典学派的側面の存在から『政治算術』＝重商主義的側面への純化として把握されていた。しかしこの視点からは、その後に執筆された『貨幣小論』――マルクスが「重商主義的見解はその最後の痕跡まで消えうせている」と評価したもの――をどのように評価したらよいのであろうか。白杉氏のペティ評価は、その一貫性に問題を生じることになろう。また渡辺氏においては、『租税貢納論』『政治算術』『アイアランドの政治的解剖』『貨幣小論』といった代表的諸著作を同一次元に平面的に並べて、「混在」を主張されることになっている。これらに対して松川氏は、人間ペティに内在することを通して、彼の経済理論と方法を一つの生成過程として明らかにしていかれる。とりわけ一六四八年前後におけるペティの最初の経済理論、一六五〇年代クロムウエル共和制下でのアイアランドにおける実践活動等の内容解明において非常に貴重な研究を示されている。しかし、ペティ経済理論に内在し、その総体を彼の著作順序にそくして明らかにしてゆく点では、なお多くの課題を

残されているといわねばなるまい。(8)

要するに従来の諸研究は、ペティの経済学的諸著作を、一つの発展過程をなして確立していった全体として把握する点において決定的な弱さをもっているといえよう。そしてこうした弱さを生み出した重要な原因の一つが、一六四七年ピューリタン革命下において書かれたペティの最初の経済理論の解明と位置づけが決定的に弱かった――この点にたちいっておられるのは松川氏のみといってよい――点にあることを記しておかなければならない。

以上の整理をふまえて、ペティの経済学的諸著作総体の関連性について、われわれの把握をここに記しておこう（下図参照）。

すなわちペティの経済理論は、ピューリタン革命下、それへの理論的加担として書かれた〝原像〟の内容が、クロムウエル共和制下での実践――アイアランドにおける測量家・行政官としての実践――を媒介とすることによって、一六六二年『租税貢納論』以下の三期に区分しうる過程を通して確立していったものとしてとらえねばなるまい。しかもこの過程は、たえず実践活動との相互媒介において発展・確立してゆ



く過程であったのである。

以上のように従来の諸研究がもつ基本的問題点を整理した上で、最後にこの小論の課題を次の三点に設定する。第一、一六四七年前後のペティの経済理論を〝原像〟として位置づけ、それ以後の三期をその発展過程としてとらえることによって、ペティ経済理論を発展的全体性において把握すること。第二、ペティ経済理論に独自の統一性をもたらしている骨格的論理構造を解明すること。第三、以上の解明をふまえて、ペティ経済理論の性格を論定すること。

（4）白杉庄一郎「ペティの経済理論」（上）・（下）『経済論叢』第五十七巻第一号・第二号、参照。

（5）マルクスのペティ経済理論の評価についてここで若干ふれておこう。

マルクスのペティ経済理論についての評価は、時間的経過にそって基本的には三つの段階からなっている。

第一段階。一八五七～一八五九年の時期における『経済学批判要綱』～『経済学批判』での評価。――㋑『租税貢納論』も当然読んでいると思われる（『経済学批判要綱』高木幸二郎監訳、一〇〇八ページ参照）が、引用はすべて『政治算術』からなされている。㋺分業把握などについての積極的評価をなしつつ（『経済学批判』国民文庫版五〇ページ）も、彼を特徴的には「重金主義者」として評価する。㋩このことは

「十七世紀の英国民の活動的なむこうみずの致富欲『経済学批判要綱』一〇〇八ページ）を代表するもの、また「彼は重金主義の観念にとらわれて、金・銀を獲得する特殊の種類の現実的労働を交換価値をうむ労働だと評価した」（『経済学批判』国民文庫版五〇ページ）といった箇所等々にみられる。

第二段階。一八六〇年代の『剰余価値学説史』における評価。――㋑『租税貢納論』からの引用が前面に出て来る。マルクスが『租税貢納論』の抜書きを作ったのは一八六三年になってかららしい。『経済学批判要綱』高木幸二郎監訳一三〇五ページ参照）㋺ペティの労働価値説的側面が強調され評価の中心にすえられる。㋩このことは重金主義的側面が「入りまじっている」としても「この著書（『租税貢納論』―引用者）で彼は、事実上、諸商品の価値を、諸商品に含まれている相対的な労働量によって規定している」としているところ等々にみられる。

第三段階。『資本論』～『反デューリング論』での評価。――㋑『租税貢納論』からの引用をふまえつつ『貨幣小論』からの引用が前面化する。㋺「誤りそのものさえ天才的である」という評価の上に、『貨幣小論』の「他の著書にみられる重商主義的見解はその最後の痕跡まで完全に消えうせている」という積極的評価をなし、彼を「近代の経済学の創始者」として名実ともなった評価を確立する。

このようにマルクスのペティ評価は決して固定的でなく、

三段階の推移を通して、しかも重商主義的側面（重金主義）を次第に脱皮してゆくものとして、それ自身発展している。そのかぎりでマルクスのペティ評価を部分的に引用したり、三段階の評価を同一次元であつかうことは誤まりであり、その総体としての評価を問題にしなければならない。

（6）渡辺輝雄『創設者の経済学』未来社、一九六一年、参照。

（7）松川七郎『ウイリアム・ペティ』岩波書店、一九六七年、参照。

（8）松川七郎、前掲書、三九二～三九三ページ参照。なお松川氏は、ペティが重金主義（重商主義）的立場に立っていることをも指摘されている。前掲書一九三ページ、三九三ページ。

II　ペティ経済理論の原像

一

ペティが彼の経済理論を本格的に展開しはじめるのは、一六六二年に執筆し、匿名で出版した『租税貢納論』からである。しかしながらそのような本格的展開のためには、一六四〇年代から一六五〇年代――ピューリタン革命（＝市民革命）下――の理論的・実践的諸活動が不可欠の前提となっていた。そこで、われわれが、ペティ経済理論を総体的・体系的に把握するためには、われわれもまた、まずこの段階――ピューリタン革命下――での彼の理論的・実践的諸活動の内容を跡づけ、それが彼の経済理論形成過程においてもつ位置を明らかにしなければならない。ところで、ペティのピューリタン革命への加担を時間的経過にそって整理すると、それは基本的には二段階に整理される。

第一段階は、一六四六年、オランダ、フランス遊学からの帰国後、遊学中摂取した近代諸思想[1]――とりわけ近代自然科学思想――をふまえての理論的諸活動の段階であり、第二段階は、クロムウェル共和制下、一六五二年から一六五九年にわたるアイアランドでの実践的諸活動――とりわけダウン・サーベイ、没収地分配事業、人口センサス[2]――の段階である。

ところで、ペテイ経済理論の体系的総体把握をめざすわれわれにとっては、この二つの段階の諸活動の中でもとりわけ第一段階における理論的諸活動が重要である。何故なら、それはペティ経済理論の原像＝端緒を提示していると思われるからである。したがってわれわれは、この章において第一段階の内容＝理論的諸活動の内容を、検討してゆくことにしよう。

ペティは第一次内乱が終結した年――一六四六年――にイングランドへ帰国した。そしてしばらくは、ラムジーで家業である織元の仕事に従事した。しかし、大陸遊学中に学んだ近代諸思想は、彼の関心領域を、市民革命下の新興科学へと向かわせていった。「ロンドン理学協会」――「オックスフォード理学協会」――「オックスフォード大学医学教授」ということの間の活動の場の推移は、そのことを如実に示してくれる。(3) しかしわれわれが特に注目しなければならない点は次の点である。すなわち、ペティは、大陸遊学中とその後に摂取した近代自然科学を中心とする新興諸科学の内容を、社会――ペティにおける political body――の解明に適用することを通して、彼独自の社会経済思想を展開していったことである。(4) そしてこのような社会経済思想の展開こそ、ペティの市民革命への最初の加担であった。そうだとするならば、この段階におけるペティの理論的諸活動の検討は、なによりも彼の社会経済思想の解明でなければならないといえよう。そしてこの段階におけるペティの社会経済思想に関する諸著作は、現存しえているものについては“THE PETTY PAPERS”(5)にみることができる。そこで“THE RETTY PAPERS”を資料として、その内容的解明にすすもう。

(1) この章全体について、松川七郎氏の研究――『ウイリアム・ペティ』、その他一橋大学『経済研究』掲載の諸論文――から非常に多くを教えられた。松川七郎、前掲書、一〇〇～一三二ページ参照。
(2) 松川七郎、前掲書、二八六～三五一ページ参照。
(3) 松川七郎、前提書、一三九～一五九ページ参照。
(4) 松川七郎、前提書、一六〇～一九五ページ参照。
(5) “THE PETTY PAPERS”.Some unpublished Writings of Sir William Petty from the Bowood Papers, Edited by THE MARQUIS OF LANSDOWNE, 2 Vols. 1927. なお、この文献は、重田晃一氏の御好意によって手にすることができた。ここに記して深く謝意をのべておきたい。

二

さて、この段階――一六四六～一六五〇年――におけるペティの社会経済理論に関する諸著作を整理すると、基本的には「教育」に関するものと、産業交易 trade に関するものとにわかれる。すなわち次の諸著作である。(6)

〈教育に関するもの〉

(1) The advice of W.P. to Mr. Samuel Hartlib. For the

Advancement of some particular Parts of Learning. [1647] London, 1648.

〈産業交易に関するもの〉

(2) Collections for the history of Trade & c. (London, 1647)

(3) History of Trades [1647?]

(4) An Explication of Trade and its Increase. [1647?]

(5) Observations of England. [1647?]

これらの二つの分野に分類しうる諸著作は、相互に密接な関係をもっている。(7) しかし、われわれはここでは、そのうち、産業交易に関する諸著作をとりあげることによって、直ちにペティのこの段階における経済理論の基本的内容を追究してゆくことにする。

現在、われわれがみることができる産業交易に関する著作は、(3)、(4)、(5)の三つである。そしてこの三つの著作の内容を検討してみると、(3)は(4)のための準備的草稿であり、(5)は(4)の補足的展開——イングランドに具体化した形での——である。したがって結局(4)がこの三つの著作の中心的位置を占めているといえる。そこでわれわれは、主として(4)の内容を検討することによって、この段階におけるペティ経済理論の基本的内容を明らかにしていくことにする。

さて先ず(4)への準備的草稿といえるであろう(3)『産業交易史』の内容を概見しよう。これは約二ページ余りの「メモ的断片」であり、一見三〇〇に近い固有名詞の羅列からなっている。しかし、その内容をみてゆくと大雑把ではあるが一つの流れをもっていることがわかる。

すなわちペティは、先ず鉄からつくられるもので生産活動に関連する諸物品名—大きくは生産手段としてくくれよう—を列挙する。そして次に人間の物質的生活に必要な諸物品名を、食・衣・住の順序で列挙し、つづいて、それらの諸物品の生産諸手段—技術—、職業、運送手段—船舶等—、交換手段—貨幣—等を羅列している。

要するにペティは、この「メモ的断片」において、産業交易の基本的立脚点を人間の食・衣・住という物質的生活におき、その発展の基礎を、なかんずく鉄からつくられる生産諸手段の増大にもとめることによって、萌芽的にではあれ産業資本的立場からの産業交易の増進をイメージしているといえよう。そして、このような(3)にみられる萌芽的視点が、より一層具体的・内容的に明らかにされているのが(4)なのである。

そこで次にわれわれは、この段階の中心的著作と思われる(4)『産業交易とその増進についての解明』の検討にうつろう。この検討をわれわれは、次のような順序でおこなうことにする。先ず、ペティの叙述にそくして考察し、次にそれをふまえて、この段階におけるペティ経済理論の基本的内容を再構成する。そして最後に、それに対する評価・性格規定をこころみる。

さて、この文章もまた四ページ余りの短文である。そして全体の構成は、前半の、産業交易に関連する諸概念の定義をおこなった部分と、後半の、産業交易の生成・増進について記述している部分とからなっている。まず前半部分の「定義」の検討からはじめよう。

「諸定義」の部分は一五の定義からなっている。ここにその全内容を記しておこう。

「諸物品 Commodities.——人間が必需・装飾・快楽・防衛等々のために使用するすべての物である。たとえば食用肉・飲料・衣服・家屋・武器等々、その大部分は税関の税率表に列挙されている。

産業交易 Trade——諸物品の製造・集荷・分配および交換である。

貨幣 Mony——諸物品の共通尺度である。あらゆる人と人をむすぶ共通の紐帯。諸物品の等価物。

必需品 Necessaries——一人の人間が、それなしには、人間が自然的に可能な健康と力とにおいて人間の寿命の通常の期間を生きることができないような諸物品である。

富んでいること Rich——自分自身が使用できる以上の諸物品を所有していることである。

力 Power——他人の諸物品を奪取することができることである。

偉人 Great Men——多数の人々に対して力をもつことである。

主権者 Soveraign——万人の力、したがってまた万人が所有する諸物品を処分しうる人である。

富んでいる・力のある・偉大なということの比較 Rich, Powerful, Great in Comparison——全世界、またはある主権者の臣民、またはある管区内の住民、あるいはある種族・階級または宗派の人々の半分が、他の半分よりもいっそう多くの富または力あるいは偉大さをもっていることである。

労働 Labor――人間が自然的にそれに耐えうるだけの時間にわたっての、諸物品のための人間の単純な運動（simple motions）である。

熟練 Skill――多くの準備的習練なしにはなしえないことを〔それなしに〕なしえることである。

技術 Art――諸物品の生産において多数の人々の労働や熟練に匹敵すること。

貨幣の利子 Interest of Mony――一定期間、貸し手が自己の貨幣〔の使用〕を抑制することに対して、借り手が元本をこえて貸し手にあたえるものである。

為替料 Exchange of Mony――ある人が、どこか他の場所で同じ金額を手に入れるために、他の人にあたえるものである。

共通価格 Commonprice――成人男子一人の日々の労働である」(9)。

さて、以上の「諸定義」の全体を一見するとき、われわれは、政治次元の「諸定義」――「主権者」「偉人」「力」等――と経済次元の「諸定義」とが混在しているのをみいだす。しかしそれらの「諸定義」相互の関係をみてゆくと、そこに一定の関連性をよみとることが可能である。すなわち、「力」「偉人」、「主権者」といったものは、「富」をその物的集中的表現とする「産業交易」――経済社会――をはずしては意味をもたないこと、要するに「産業交易」を基礎としてのみ成立しえているという関連にあると考えられることである。そしてわれわれは、ペティが社会全体の「比較」について示しているときの「富んでいる・力のある・偉大な」という順序の中にその象徴的表現をみいだしうるといえるのではなかろうか。

要するにペティは、「諸定義」という表現形態を通して彼独特の社会像――「政治体」像――を描こうとしていたと考えられる。そしてその場合の社会像とは、ペティが彼をとりまく社会をピューリタン革命の推進主体の側からとらえたときの社会像であり、したがってまたペティにとってはピューリタン革命の指し示すべき社会像であったのではなかろうか。

そこでわれわれは、こうしたペティの社会像を「諸定義」の内容的関連性を解明することを糸口として再構成していくことにしよう。しかし、その場合、今のべてきたようにペテ

ィの社会像は、何よりも「産業交易」――経済社会――を基礎としていると思われる。それゆえわれわれは、「産業交易」＝経済社会の解明をなすことからはじめその解明のあとで彼の社会像の基本的構造を究明するという考察順序をとることにする。

先ず注目しなければならないのは、ペティの「産業交易 trade」の定義である。彼は「産業交易」を、経済諸活動を包括する概念として規定している。――「諸物品の製造・集荷・分配および交換」――。したがってわれわれは、他の「諸定義」を「産業交易」の内容規定にそくして再構成してゆくことによって、ペティの経済社会像を再現することが可能となろう。

そこでまず問題になるのが、「産業交易」の定義の前半部分をなす「諸物品の製造」過程の再現である。

「諸物品」の定義から明らかなように、ペティは「諸物品」を、そのものとしては使用価値として規定している。そしてそのものとしての「諸物品」はまず生産過程の直接的結果として実在するのであるから、ペティの「諸物品の製造」過程とは、使用価値を生産する過程＝労働過程として規定しうる。そこで「諸物品の製造」過程＝労働過程の主体的基軸である労働についてみてゆこう。

ペティは「労働」を「諸物品のための単純な運動」と定義する。この定義の中心は「単純な運動」という点である。ところで人間の労働が「単純な運動」であると規定しうることは、労働が「人間の脳髄、筋肉、神経、手などの生産的支出」[10]として把握されていることを意味している。しかもペティにあっては、生産過程は労働過程なのである。したがってペティの「労働」は、使用価値をつくる具体的・有用的労働の内容が生理学的に規定されるという独特の把握において成立しているといえよう。[11]

このようなペティの「労働」に対する生理学的内容把握は、彼の「労働」にさらに新たな性格―量的規定性―をもたらすことになっている。

ペティは熟練を「多くの準備的習練 preparatory practise」をつんだ「労働」＝「熟練」労働として規定している。すなわちペティは、「熟練」を「労働」＝「単純な運動」を基準として、あたかも単純労働と複雑労働の関係に類推しうるような量的関係性において規定しているのである。

要するに、ペティの「労働」の独自性は、具体的・有用的労働が「単純な運動」という生理学的な内容規定において把握されることによって、具体的・有用的労働のままで量的測定可能な労働となっている点にあるといえよう。(12)

今までわれわれは、生産過程＝労働過程を労働主体にそくしてみてきた。ここで生産過程にかんするもう一つの「定義」をみなければならない。すなわち「技術」である。

「技術」＝「諸物品の生産において多数の人々の労働や熟練に匹敵するもの」という規定は、労働主体の問題（＝「熟練」）のみならず、それと不可分の関係にある労働手段・用具改良の問題（＝「多数の人々の労働に匹敵」）を含んだ規定といえる。すなわちペティは「技術」という定義によって、生産過程＝労働過程全体の生産力的表現をおこなっているのである。

かくしてペティは、生産過程を、その主体的要因――「労働」・「熟練」――と客体的要因――「技術」規定にみられる労働手段・用具改良――との統一において、生産力の発展を基礎とする労働過程として把握していたといえよう。

以上の解明をふまえつつ、次にペティにおける「富」と生産過程の関連をみてゆこう。ペティは「富」んでいることを、「自分自身が使用しうるより以上に多くの物品を所有していること」と定義していた。この定義における「所有している」という規定を生産過程次元において考えるならば、〃生産による所（私的）有〃ということになる。とすれば、生産過程次元からの「富」の定義は次のような定義となろう。「富」とは、自分自身が使用しうるより以上に生産された剰余生産物である。したがってまた富の増進とは、剰余生産物量の増大である、と。そこでわれわれは、〃富の増進＝剰余生産物の増大〃という規定を更に検討してゆこう。

すでに今までの解明で明らかになっているように、ペティの生産過程それ自身は、労働過程以外のなにものでもない。したがって、生産過程次元において「富」を問題にするかぎり「富」とはなによりも質料的富であり、その増進とは、質料的富の増進＝生産物一般の増大として基本的に規定されなければならない。しかしながら、ペティは「富」の増進を単なる質料的富の増進に解消しているといえない。何故なら、ペティにとって、「富」の増進が単に質料的富の増進を意味したのであれば、彼は「富」の増進を、剰余生産物の増大と

する必要はなく、生産物一般の増大でよかったはずである。では彼は「富」＝剰余生産物という把握によって一体何を示そうとしていたのであろうか。

われわれは、ペティが剰余生産物＝富と把握するときの剰余生産物とは如何なるものかを考えてみよう。彼にあってそれは何よりもまず「自分自身が使用できる以上」の生産物である。いいかえればそのままでは自己消費されない生産物である。そして、そのままでは自己消費されないものであって、しかも経済的意味をもつとすれば、それは、流通過程に入り、再分配されるものとして以外には存在しえない。だとすれば、ペティが剰余生産物において想定しているのは、必ず流通過程に入る生産物――商品になる生産物――であるといえる。そしてペティがこのような剰余生産物を「富」とするかぎり、その「富」とは、流通過程に投じられ、分配されることを不可欠の規定としてもっている富といえよう。

生産過程次元からのペティの「富」の解明が以上のような内容として把握しうるとすれば、われわれは問題を次に進めなければならない。すなわち、ペティの「富」を全体的に明らかにするためには、その解明を生産過程次元にとどめることなく、流通過程次元での彼の「富」の構造を追究してゆかなければならない、と。そこで次にわれわれは、ペティの流通過程をみてゆこう。

ところでそれは、われわれがこれまで生産過程次元の解明においておこなったように、他の「諸定義」を「産業交易」定義の後半部分の内容――「分配および交換」――にそくして再構成することによってなしうるはずである。

これまでの生産過程の解明から、ペティの流通過程は、生産過程＝労働過程における生産力の発展を基盤とした剰余生産物の流通を出発点とすることが明らかになっている。そこでまず諸物品――諸商品――の流通は如何にしておこなわれてゆくかが明らかにされなければならない。

それは、「貨幣」を媒介としておこなわれる。すなわちペティは、「貨幣」を「諸物品の共通の尺度…あらゆる人と人とを結ぶ共通の紐帯…諸物品の等価物」として定義する。このような定義をみるとき、われわれはペティが貨幣を、何よりもまず流通過程＝交換過程に登場している諸商品――交換価値――の尺度として、そして流通手段として把握していることを見ることができる。しかしペティは、交換価値の尺度

を貨幣にとどめない。「共通価格」＝「成人男子一人の日々の労働」[13]という定義がそれである。ここにおいて彼は、労働を流通過程＝交換過程における諸商品――交換価値――の共通尺度として設定しているのである。[14] かくしてペティの労働は、生産過程において質料的富を生産する具体的・有用的労働でありながら、同時に流通過程＝交換過程における諸商品―交換価値―の尺度としての規定を付与されているのである。そしてこのような本来矛盾するはずの二つの規定を統一せしめているものこそ、ペティ独特の労働把握――有用的・具体的労働の生理学的抽象化把握による、量的測定可能な労働としての把握――にあったといえよう。かくしてまた、ペティ独特の労働把握は、彼における生産過程と流通過程との独特の結合を可能にしている基幹であったともいえる。

さて、これまでの解明からペティの流通過程＝交換過程は、「共通価格」＝労働――「貨幣」を基軸として構成されているということが明らかになった。そこで次に、このような流通過程＝交換過程に入った剰余生産物が獲得する規定＝富規定をみてゆこう。

われわれはすでに生産過程次元での考察においてペティの「富」は、流通過程に入ることを前提とした剰余生産物と考えられることを明らかにしておいた。そこで流通過程における富規定とは、この前提が実現する構造を解明することを通して、「富」の基本的規定を明らかにすることである。

さて、流通過程は、貨幣―共通価格（労働）を基軸として構成されている。したがって生産過程から出てきた剰余生産物はまず「貨幣」とかかわることによって、社会的に相互に関係し、尺度され、比較されうるものとして規定されることになる。すなわち剰余生産物は交換価値として規定される富＝社会的富となるのである。そしてこのかぎりでいえば、彼の社会的「富」――交換価値――は、「貨幣」を実体としたものであるとしかいえないであろう。しかし彼は「貨幣」の背後にもう一つの基軸として「共通価格」＝労働を設定し、それをもって交換価値を尺度するのである。すなわち、社会的「富」は、流通過程における交換価値という価値の現象形態において把握されながら、その実体を労働――ペティ独自の具体的・有用的労働――にもとめているのである。流通過程における「富」の構造がこのようなものであるとすれば、われわれが生産過程次元で把握していた、〝流通過程に入る

ことを前提とした剰余生産物〃という富把握は、実は流通過程で成立する「富」――社会的富―から生産過程における剰余生産物をみたときの、剰余生産物に対する規定であったといえるのではなかろうか。

このようにみてくると、ペティの「富」の基本的構造は次のように示すことができよう。

ペティの「富」とは何よりも社会的「富」である。しかし、その社会的「富」は、生産過程＝労働過程の直接的結果である（剰余）生産物に、流通過程次元から交換価値としての規定を付与することによってのみ成立・存続しうるという構造にある、と。

これまでの展開においては「富」の構造といっても、その運動―増進の構造については〃余剰〃という規定にその萌芽的にしめされている以上のものはなにもしめされていない。そのかぎりで彼の「富」の構造はいまだ全体的に明らかにされているとはいえない。この点に関してペティは「産業交易とその増進についての解明」の〃後半の部分〃において、とりわけ「余剰利得 superlucration」[15]という概念を導入することによって明らかにしている。したがってわれわれもまた〃後半の部分〃の考察をふまえてはじめて、この段階におけるペティの「富」把握を全体として解明しおえることができるのである。

以上でわれわれは、「諸定義」を「産業交易」の内容にそくして再構成するという方法で、彼の経済社会にたいする基本的把握を検討してきた。ここにその基本的内容を整理しておこう。

それは、「労働」―「熟練」―「技術」を基軸とした生産過程＝労働過程を基盤とし、その上に「貨幣」―「共通価格」を基軸とした流通過程＝交通過程が構築され、その中を剰余生産物―社会的「富」という規定が貫徹しているという立体的構造にある、と。

しかしながら以上のような経済社会像――「産業交易」社会像――をみるとき、この像からはその運動過程――歴史的・時間的――が明確に把握しえない。経済社会の歴史的・時間的運動構造は、生産過程における生産力の発展構造をふまえての「余剰利得」＝富の増進過程を考察することによって明らかになりうるものとおもわれる。

（6）この時期のペティの諸著作についての詳細は、松川七郎氏

『ウイリアム・ペティ』一六〇～一六一ページ参照。

(7) 「教育に関するもの」の内容の研究としては、松川七郎氏の前掲書での研究が示唆深い。ここにその結論とおもわれる部分を引用しておこう。――「このようにみてくると、ベイコンの名に終始しているペティの『教育論』を一貫するものは、国民の皆労による皆学を基礎とする科学研究の組織化＝科学技術の進歩＝発明・発見の盛大化、つきつめていえばマニュファクチュアの発達にもとづく社会的生産力の増進によってもたらされる全国民の富裕化と前資本主義的諸制約からの人間解放の思想であるということができる」。（一七二ページ）

(8) ペティはこの当時、ハートリップのすすめで『産業交易史集成』を執筆する計画であったらしい。ここでの三著作も、そのための準備的考察の一部分と思われる。"The Petty Papers" Vol. 1. 二〇三ページ参照。

(9) ここでの訳は、基本的には松川七郎氏の訳（前掲書一七九～一八〇ページ）を使用させていただいた。

(10) マルクス『資本論』青木文庫版第一分冊、一二七ページ。

(11) 松川七郎前掲書、一八一ページ、四六〇ページ参照。

(12) このような生産過程での労働の量的測定可能なものとしての把握が、流通過程での「共通価格」規定を実現する。

(13) ここでの「成人男子」とは一六才以上の男子のこと。"The Petty Papers" Vol. 1. 二一二ページ参照。

(14) ここにみられる「貨幣」と「日々の労働」という二つの尺度の関係は、前者が外在的尺度であるのに対して、後者が内在的尺度をなすという関係にあるとおもわれる。われわれは、このような二つの尺度の関係が分析過程において明確化されて示されているのを『租税貢納論』の中にみることができる。

なおまた、この場合の「日々の労働」という規定には、〝労働時間〟としての把握と、日々の労働＝〝労賃〟＝〝日々の食物〟としての把握へと流れていく面との二面が潜在しているとも思われる。

(15) 「余剰利得」という訳は松川七郎氏の訳を使わせていただいた。現在このことばは死語となっている。『政治算術』松川七郎訳岩波文庫版、訳者解説参照。またランズダウンは「余剰利得」への注として、それを「貯蓄すること、あるいは富の蓄積」としている。"The Petty Papers" Vol. 1. 二一四ページ。

三

『産業交易とその増進についての解明』の後半部分の内容を一言でいえば、「産業交易」の生成と増進の解明である。われわれはまず、ペティの展開にそくして考察してゆくことにしよう。

ペティはいう。――「もし人間が、獣のように天然の産物で生活し、それらが生育するままに消費し、しかも一つの物

品しか存在しなかったとしたら、産業交易は全く存在することが出来ないであろう。しかし、もし諸物品が多種多様になり、各人が彼の興味、労働、熟練、力が生産しうるようなあらゆる種類の物品を消費するようになっているとすれば、産業交易は極度に増進しているであろう。肉や飲物といった諸物品は使用とともに直ちに消滅してしまう。他のもの（衣類など）は、より長く存続する。次には家具。さいごに住居〔が最も長く存続する〕。」（“The Petty Papers” Vol. 1. 二一一ページ―以下引用はページのみを記す）「しかしそれら二つの産業の極端な状態は、単に理論上においてのみ存在するが故に、それらは、ただ今日の世界に現実に事実上存在している産業交易を理解する助けとなるかぎりで言及するにすぎない。われわれの考察のために適当な〔現実に存在する〕〔産業交易の〕最低の状態とは、三つの産業交易――一つは食についての、もう一つは衣についての、三つ目は住についての――しか存在していない状態である」。（二一二ページ）

すなわち彼は、「産業交易」の「極度に増進」した状態と、「存在しない」状態という「二つの極端な状態」を理論的に想定し、その両者の比較関係から「産業交易」の生成、増進の根拠を、生産の「多種多様」化――生産の発展（労働・熟練・力）――にもとめる。そして次に彼は、このような理論的想定から導きだされた「産業交易」の生成、増進の根拠についての視点――生産力視点――をもって、現実の「産業交易」の生成、増進の構造を考察していこうとするのである。このかぎりで、彼の冒頭における理論的究明は、現実の「産業交易」の展開過程を解明してゆく基礎視点を獲得するための理論的操作であったといえよう。

そこでペティは現実の「産業交易」の「最低の状態」＝生成段階を、人間の物質的生活の最低基盤にかかわる三つの「産業交易」―食・衣・住―のみの存在している状態として設定する。(14)

つづいてペティは次のようにいう。――「産業交易がもう少し増進した段階とは次のような状況のときである。すなわち、食についての産業交易が、穀物の耕作者と家畜の飼育者に分化され、衣についてのそれが、織布職・いかけ職・および裁縫職・靴職・革職に、また住についてのそれが、かじ職・石工および大工に分化される。」（二一二ページ）このようにペティは、「産業交易」の増進を、食・衣・住三つの「産業

交易」のそれぞれが「分化」――多様化――してゆく点にもとめ、そのような展開の例解をイングランドに想定して次のように示す。――「今、イングランドに二千五百万ェーカーの土地、六百万の人口が存在しており、そして産業交易は右に述べたような分化の状態にあると仮定しよう。その場合私は、次のように推測する。穀物のための土地の耕作者一〇万人、家畜の飼育者二万人、裁縫師三万人、織布職およびいかけ職五万人、靴職および革職一万五千人、かじ職八千人、大工一万二千人、石工五千人、――合計約二四万人、あるいは百万人の四分の一の成人男子。しかるに総人口六百万人中には、このような一六才以上の成人男子はこの六倍も存在する。そこでさらに、これらの産業交易についていない人々もみな、これらの仕事を容易にやれるにもかかわらず、私があげただけの人数にしか仕事口がないと仮定しよう。この場合、私は思うのだが、土地のすべての富 wealth は当然のこととして土地の所有者と右にあげた産業交易者 tradesmen とに属する。なぜなら、それらはすべて、この両者によって生みだされたものだから。そしてここにあげた地主 landlord と産業交易者以外の残りのすべての人々は、彼等の使用人や従者にすぎない。しかもこの場合、地主は一人を選びとるのにその選択の競争者として六人も存在するのだから、産業交易者にたいして大きな力をもっている。

それゆえ、産業交易がこのように低かった段階では、地主の力はより高く、土地はいわば国民の唯一の富であった」。（二一二ページ）

「産業交易」の増進を生産の「分化」=「多様化」を基盤として考察するペティは、イングランドの数量的分析[15]にその例解をもとめることを通して、「産業交易」の増進が「産業交易」社会――経済社会――にいかなる変化――「効果」――をもたらすかを問題にする。彼はその評価の基準を、産業交易の増進と富実体との関係、「地主」と「産業交易者」との力関係、の二点に設定する。

すなわち、右のような「産業交易」の増進がいまだ「低かった」段階とは、「産業交易」の「分化」が低いのだから、働くことができる「成人男子」の数に比してその「仕事口」が少ない――六分の一――段階を意味する。したがって、土地にかかわる経済主体である「地主」の「力」が「産業交易者」[16]より「高く」、また「土地」が「いわば国民の唯一の富」

ということになる、と。

われわれは、さらに「産業交易」が増進すると、右のような関係はどうなるかをみてゆこう。

ペティは次のようにいう。――「だが食にかんする二つの産業交易が再び刈取人か打穀者、製造者、パン焼人、醸造者・肉屋・料理人に、そして衣にかんする五つの産業交易が、梳毛工・紡績工・染色工・つやだし工・幅だし工・ボタン製造工等々に分化し、そして他の産業交易でも同様の分化が行なわれるときに、（私は思うのだが）以前には百万人の四分の一が土地といっしょになって六百万人を、いいかえれば一人が二四人を維持していたのにたいして、いまやこのように増加した人々の労働は土地と等価になることとなろう。それは仕事口が非常に増加して、地主がすべての人々を雇わなければならないとき、少くとも、よりどりできなくなったときのことである。この場合、地主と産業交易者の力は均衡すると私はいう。

さらに一層産業交易が増進して、神学者・医者・法律家・兵士・海外から原料を運んでくる海員等、要するに、海と海運にかんするあらゆる産業交易が――いなそれのみならず、公園や香水や宝石や音楽家や喜劇俳優等といった娯楽や装飾にかんする産業交易まで必要になってくれば、そのときにはおそらく、これらの産業交易者や各部門の専門家たちの力は、最初の場合に地主の力が産業交易者を上まわっていたように、地主の力をはるかに上まわることになるだろう。

われわれは、産業交易の増進とは何であり、その効果が如何なるものであるかをみてきた。ここで私は、もう一度その点について例示しよう。――もし万人がその草の所有者であるとき人々が草だけを食べているとすれば、大地そのものがなしたものに、何ものをも付加されてはいない。しかし、もし産業交易が増進するならば、すなわち人々があらゆる種類の草を無差別に食べないで一つ（すなわち小麦）を選択し、（それを十分に獲得するために）以前にはなさなかった土地をすきならすことをおこなうならば、否それのみならず収穫物の全部すなわち茎や葉や根まで食べてしまうのではなく、種子だけを食べ、しかも種子を未加工のまま食べずに、それを粉にひき、精粉にし、一種類だけではなく他の諸成分をまぜ、簡単にまぜて生やきにするのでなく、念入りに調理し、焼き、そして最後に小さく切って食べると仮定しよう。その

場合、大地の最初の最も単純な生産物のうえにおこなわれる種々の操作・労働・技術の累積が土地の価値を減少させるということは明白である。すなわち、土地は以前、生まの小麦あるいは煮たりしただけの小麦が人々の欲望を満足させた時に比べて、土地に投下された労働に対してはるかに低い比率を占めることになる。それ故に、多くの人々の労働が、一人の人に念入りに仕上げられた食物を供給するのに十分ではないということがおこってくる。同様のことは衣類やその他のすべての必需品についてもいわれうる。たとえば、一枚の生の羊皮と一枚の刺繍されたスペインの布との間には非常な異いがあるし、小枝で編み合わされた小屋と家具のある小部屋とでは非常な異いがある。

それゆえ、産業交易は、多種多様の諸物品を所有することを望んでいる人々が、粗末な食事をとり、のらくらと生活するよりはむしろあまんじてそれらの獲得のため骨折る場合には、人民の増加なしにでも増進しうる」。(二一三〜二一四ページ)

われわれはこれまで、ペティの「産業交易」の増進を、彼の表現にしたがって、「産業交易」の「多種多様」化＝「分化」として表現してきた。しかし、ここまでの彼の展開をふまえるとき、彼の「多種多様」化＝「分化」とは、内容的には社会的分業の生成・増進のことであるといえるし、またこう言う方がより正確な表現であるといえよう。[17] すなわち「産業交易」の増進＝社会的分業の増進である。

さてペティは、ここの部分で「産業交易」の一層の増進＝社会的分業の一層の増進を問題にしている。われわれは、彼が「産業交易」の一層の増進＝社会的分業の一層の増進を如何なるものとしてとらえているかをみよう。

彼はまず、社会的分業の一層の増進を、「仕事口」が増大することとして把握し、したがってまた、それだけ「労働」する「人民」の数がふえ、「仕事口」のない人というのは次第にいなくなるものとして把握する。

しかしペティは、社会的分業の増進を、単に「仕事口」の増大＝「労働」する「人民」数の増大としてのみ把握しているのではない。彼は、「労働」する「人民」の数がふえなくても、「労働・技術」の発展によっても「産業交易」が増進しうると考えているのである。要するに彼は、社会的分業の増進の内容―生産力発展の内容―を、労働の量の増大―人民数

の増大―と、労働の質・技術の発展の二面から把握していたといえよう。

以上のような二点において、「産業交易」の増進＝社会的分業の増進の基本的内容を把握した上でペティは、それが「産業交易」社会＝経済社会にもたらす「効果」を、「産業交易」の「低い」段階における「効果」との関連で問題にする。すなわち、「人民」の「労働」の量的・質的増加による、生産物における「土地の価値」と「投下された労働」との比重―富の実体における「土地」と「労働」の比重――の前者から後者への移行。したがってまた、経済主体としての「地主」と「産業交易者」との「力」関係における前者から後者への移行である。

〝後半の部分〟の冒頭からここまでのペティの展開をみてみると、彼は「産業交易」の増進を、社会的分業の増進による生産物の「多種多様」化の問題として展開してきているといえる。そしてそのかぎりで、彼が今まで示してきた「富」とはなによりも質料的富のことであり、「土地の価値」、「投下された労働」という場合も、使用価値次元の問題として示されているのであり、さらに、経済主体の移行――「地主」から「産業交易者」への――の基準も、質料的富の生産主体としての両者にもとめられていたといえよう。要するに、ペティは、「産業交易」をその基盤としての生産力次元に還元して展開してきたといえよう。

しかしペティは、この小論の最後の部分で、これまでの産業交易の増進についての生産力次元からの展開を、いわばそれに対して生産関係次元からとらえなおして展開しているのである。われわれはその内容を次にみてゆこう。

ペティは先の引用にすぐつづけていう。――「それゆえまた、産業交易は何んらの余剰利得もなしに増進しうる。すなわち、大地や水よりも、食物からはるかに縁が薄いために、一人の人が一皿の肉を準備するのに日に十一時間働き、十二時間目にそれを食べ尽してしまう場合である。そして、たとえ人民や産業交易が増進しても、余剰利得がなければ、富の増進ではない。また腐りやすい諸物品での余剰利得、日常的・一時的本質の諸物品での余剰利得は、最上の富の増進ではない。富の最上の増進は、金・銀・宝石等での余剰利得である。それらのものは腐敗しないし、その価値が時間や場所のめまぐるしい変化に影響されることもなく、実際的にいって

永久的で普遍的な富である」。（二二四ページ）

〝後半部分〟におけるこれまでの展開視点――生産力視点――に立つかぎりでは、産業交易の増進＝社会的分業の増進＝質料的「富」の増進となるはずである。しかるにペティはここにおいて、「産業交易」の増進がただちに「富の増進」を意味しないのであり、それが「余剰利得」であることによってはじめて「富の増進」たりうる――「余剰利得」＝「富」の増進――と主張する。いったい彼は、「余剰利得」＝「富」の増進」という関係規定によって何を示そうとしているのであろうか。

この問題の鍵は、「余剰利得」という概念がにぎっていると思われる。それ故われわれは、「余剰利得」概念の解明を突破口として、彼の意図を究明してゆくことにしよう。

(1)彼はまず、「十一時間かかって準備した一皿の肉」を「十二時間目に食い尽す」としたらその場合には、「産業交易」は増進しても、「余剰利得」は存在しないし、したがって「富の増進ではない」と主張する。このような主張を、彼のこれまでの産業交易の増進＝社会的分業の増進という展開をふまえて検討するとき、われわれは彼の「余剰利得」概念に関して、次の諸点を明らかにすることができる。

(a)　彼の「余剰利得」とは、産業交易＝社会的分業の生産力的発展を基盤としていること。

(b)　そして「余剰利得」概念が成立するのは、基盤としての産業交易の増進＝社会的分業の増進が、剰余生産物―費消される以上の生産物―の増進、したがって蓄積をもたらすものとなるときであること。

(2)しかしペティは「余剰利得」概念を剰余生産物一般の増進＝蓄積という規定にとどめない。彼は「余剰利得」の存在形態を問題にし、「腐敗しやすい」か否か―耐久性―という素材的性質＝使用価値的規定を基準とすることによって、「腐敗しない」金・銀・宝石等での「余剰利得」を最上の形態であるとするのである。このような彼の展開から次の諸点が明らかになる。

(a)金・銀・宝石等の形態での「余剰利得」を主張するとき、「余剰利得」は金・銀・宝石等の蓄蔵という意味を前面化してくること。

(b)素材的性質＝使用価値視点は、蓄蔵に有効な形態を規定するものとして意味づけられている。しかしそうして規定さ

れた蓄蔵される金・銀・宝石等は、それが質料的富であるがゆえに蓄蔵されているのではない。それは明らかに、交換価値の物象化されたもの＝社会的富であるがゆえに蓄蔵されるべきものとされているといえること。

以上われわれは、「余剰利得」概念の基本的内容を二点にわけてみた。ではペティにおいて、この二面の内容規定は相互にどのように関連するのであろうか。

まずいえることは、(1)が余剰利得の基盤の側面からの規定であるのにたいして、(2)がその現実の存在形態の側面からの規定であるという次元の相異をもちつつ、余剰利得概念の二要因となっていることである。この二つの側面は、これをわれわれが悟性的に評価するかぎりでは、矛盾をはらんでいるものといわなければなるまい。何故なら、基盤からの規定の論理を貫徹してゆけば存在形態の区別は問題にならないはずであるし、また金・銀・宝石等での存在形態からの規定の論理を貫徹してゆけば、生産過程を基盤とすることは不可欠のものとはならないはずであるから。

しかしながらわれわれが、ペティ自身にそくしてこの二要因の独特の関連の内容にたちいるとき、そこにペティの積極的な問題意識と解明の視座がすえられていると言えよう。

ペティにあって(1)と(2)が二要因として関連することは、現実の存在形態—表象—としての金・銀等—社会的富—の蓄蔵が、産業交易＝社会的分業の発展にもとづく剰余生産物の増進＝蓄積過程に結合することを意味する。その結合の内容は、次のように示すことができよう。金・銀等の社会的富としての規定が、剰余生産物の増進＝蓄積過程の成果としての剰余生産物一般にまで波及してゆく方向をもちうること。そしてそのことは同時に、剰余生産物の増進＝蓄積過程という生産過程の展開が、社会的富—金・銀等—の蓄蔵を規制し、蓄蔵が生産＝再生産過程を通しての蓄積へと転回する方向をもちうることになる、ということである。

このように二要因の関連の内容的把握をおこないうるとすれば、ペティの「余剰利得」という概念は、ペティ的現実における重金主義（重商主義）的富財観をその形態規定としながらも、生産力的に把握された生産過程をその基盤規定とすることによって、重金主義（重商主義）的富財観を克服する視座と内容をはらんだ概念として評価しうるであろう。ただし、このような積極的意義をはらみながらも、なお二つの側

面が直接的・無媒介的に結合＝関係しているかぎりで、それはいまだ内容的充実をえた概念とはいえない。そのまったき概念的把握は、ペティ自身にとっての課題である。が、この課題を遂行する視座とその条件―産業交易の生産力的把握―はすでにここで設定されている。

ペティにとって「富」とは、前節で明らかにしたように基本的に社会的富であった。ところでさきの引用のさいごで彼はいっている、金・銀・宝石等が「実際的にいって、morally speaking 永久的で普遍的な富である」と。ペティが流通過程に現象する金・銀等を社会的「富」の本質として把握――重金主義的（重商主義的）把握――していたのであれば、この部分の表現は「真に」ということでなければならないはずである。しかし、彼は「実際的にいって」という相対的表現をしている。すなわち彼が社会的「富」の実体を、「余剰利得」がそうであったように、生産物一般に基本的には設定した上で、使用価値的規定――耐久性――を基準として他に比して金・銀等での社会的「富」を「実際的にいって永久的で普遍的富」として規定しているのである。

要するに、ペティが社会的「富」を流通過程に現象する交換価値の次元で把握していたかぎりで、彼の社会的「富」は何よりもまず金・銀等として表象されていたのである。しかし彼にあっては、このような表象―金・銀等での社会的「富」――がただちに本質を意味したのではなく、その本質は生産過程に求められる方向へと歩みはじめていたのである。[18] 交換価値という流通過程で現象的に把握されたかぎりでの社会的「富」が、自己の増進基盤を生産力的に規定されている生産過程にもとめるべく外的に――かかわるべき生産過程が使用価値次元で規定されているかぎりで、かかわりは外的でしかありえない――かかわっていくのである。まさしくそれは、生産過程に本質をもとめてゆく第一歩であるといえよう。

右にみたような「余剰利得」概念、「富」把握がペティにおいて形成されえた背景は何であろうか。それは何よりもピューリタン革命であるといわなければならない。ピューリタン革命下、革命の重要な主体として登場してきた経済主体である「産業交易者」の立場にペティが立っていたことであり、その立場から現実の経済社会の表象を再構成しようとする立場に立っていたことである。

このようにみてくると、ペティが「余剰利得」＝「富の増進

という関係規定において示そうとしたことは、ペティ的現実において示されていた富の増進＝金・銀の蓄蔵という把握を、生産過程での剰余生産物の増進＝蓄積過程と結合させることによって、前者の克服・転回の視座をすえることにあったといえるのである。(19)

以上で、〝後半の部分〟のペティの展開にそくした考察を終える。ここで〝後半の部分〟の基本的内容を整理しておこう。

第一、経済社会――産業交易社会――の展開基盤は、産業交易の増進＝社会的分業の増進を基軸とした生産力の発展にあること。

第二、そうした生産力の発展は、必然的に質料的富の実体を「土地」から「人民の労働」へとその比重を転回せしめ、生産力の実体としての経済主体を「地主」から「産業交易者」に転換せしめること。

第三、しかしこのような産業交易の生産力的発展は、「余剰利得」として社会的にとらえなおされることによってはじめて、社会的「富」の増進――とりわけ金・銀・宝石等での「余剰利得」がその最上の増進――となり、真に経済社会の発展――生産関係的展開――となることができること。

第四このような産業交易の増進――「余剰利得」――「富の増進」という生産についての関係による経済社会の構造把握は、〝前半の部分〟における、生産過程（余剰生産物）――共通価格――社会的「富」という把握を、ペティ自身が動態的にとらえなおし、概念的にも深化せしめた把握であること。

これまでわれわれは、『産業交易とその増進についての解明』においてペティが展開している経済社会――「産業交易」社会』――の基本的内容を、前半と後半にわけて考察してきた。そこでこれまでの考察の総括として、この段階――一六四七年前後――におけるペティ経済理論の性格を論定しておこう。

第一、ペティの経済社会は、生産力的に把握された生産過程を、流通過程で把握された価値＝交換価値が自己の成立・存続の基盤としてたえずとりこんでいく関係――生産力と生産関係のペティ的統一――として基本的に構成される。このような経済社会は、まさしくそれまでの重商主義段階を転回せしめる端緒となったピューリタン革命の経済社会像として、ピューリタン革命の前進性と限界性を反映した経済社会像て

あるといえる。

第二、こうした経済社会像の構成は、彼独特の把握をうけた労働を基幹とし、経済諸要素を数量的に分析することによって可能となった。そして、このような労働把握、数量的分析方法は、彼の経済理論総体を貫ぬく特徴となっていった。

以上をもってわれわれは、一六四七年前後ピューリタン革命の内乱下におけるペティの経済理論の考察をおえる。次の課題は、右のような経済理論がその後どのように展開されていったか、ということを究明してゆくことである。ところでペティの次の経済理論展開は、その間に一六五〇年代クロムウエル共和制下でのアイアランドにおける土地測量家・行政官としての実践を媒介項としてもっている。すなわち彼は、次の段階においては、国家の側から経済社会の建設に実践的にかかわってゆき、それをふまえて次の経済理論――『租税貢納論』――を展開していったのである。

そこで最後にわれわれは、一六五〇年代のペティの実践活動の位置・性格を明らかにするためにも、この段階のペティにおける経済社会と政治社会との関係――“political body”の基本像――を整理しておこう。これはまた「産業交易とその増進についての解明」の〝前半部分〟の考察の冒頭においてわれわれが提示した、ペティの社会像のイメージを再構成することを意味する。

この問題解明の契機は「力」という定義にあると思われる。われわれは〝前半の部分〟冒頭で「力」を政治社会次元にかかわる定義として規定しておいた。しかし、これまでの経済社会の考察をふまえるとき、ペティの「力」とは、経済社会と政治社会との両者にかかわる定義であるというほうがより正確な規定であると思われる。ペティは「力」を、「他人の諸物品を奪取 take away することができること」と定義していた。この場合、「他人の諸物品」を「奪取」するということには二つの内容が含まれていると考えられる。すなわち、経済外的な強制＝政治権力によって「奪取」する場合と、経済的に「奪取」する＝譲渡にもとづく取得の場合とである。彼が産業交易の増進の中で「労働・富・力」といった形で記している場合の「力」とは、明らかに「富」の「力」として後者――経済的取得――のことである。しかし、「主権者」の定義の中で、「万人の力」といった形で示されている場合は、政治的権力のことであり、前者のことである。そこで問題は、

このような二つの「力」の規定がいかにかかわっているかということである。そしてそれは、「力」の二つの規定側面を経済社会と政治社会との関係としてとらえなおすことによってのみ明らかにしうることといえよう。

これまでの考察によって、彼の「国民の富」の増進が、産業交易の生産力的発展を基礎とすること、すなわち経済社会を基盤とすることは明らかになっている。だとすれば、ペティの社会とは、経済社会を基礎とし、その上に政治社会が成立する関係において構成されているといえる。そこで、「主権者」の「力」＝政治権力の意味を考えてみると、「主権者」の「力」とは、経済社会を基礎として、そこにおける「国民の富」の増進としての「力」にかかわることによってのみ意味をもつ「力」、いいかえれば、経済社会における「力」を育成するための「力」であるといえよう。

かくして、ペティの経済社会と政治社会の関係を内容とする社会――political body―の基本的構造は、経済社会を基礎とし、政治社会がそれを育成するものとしてその上に存在する構造にあるといえよう。そしてこのような社会こそ、ピューリタン革命の社会――資本制生産関係を育成する国家――であったといえよう。ペティの一六五〇年代の実践は、まさしく、このような国家の経済社会育成の「力」の発動の一部として位置づけられ、性格づけられうるものであると想定されるのである。

(14) 食・衣・住についてのこの様な規定は、「産業交易史」草稿の中に固有名詞の羅列としてみられる。

また産業交易の生成・増進について「イングランドについての考察」の中に次のような規定がある。――「産業交易は、人々が彼自身の家や国が最高に生産しうるより以上に多種多様な物品を必要とするときにはじまる」。「産業交易は、人々が多種多様な物品、多様な場所での生産物、種々海外における仕事なしには満足しえなくなるとき増進する」。（"The Petty Papers" Vol. 1. 二〇九ページ）

(15) ここにみられる数量的分析方法は「イングランドについての観察」の中にもみられる。（前掲書二〇八ページ）

この段階における、このような数量的分析法は、彼の経済理論の展開過程を貫ぬき、次第に精密化されていく。その意味では方法の端緒といえる。

(16) 「産業交易者」の内容は、ここでみられる表現では Tillers of the Land, Taylors, Weavers, Tinckers, Shewmakers, Tanners, Smiths, Carpenters, Masons 等々である。結局、彼は「産業交易者」によって、地主「Landlords」に対抗する新たな経済主体――ピューリタン革命推進の重要な主体

――として登場して来ていた独立自営農民を中核とする生産主体を想定していたと思われる。松川七郎『ウイリアム・ペティ』一八三～一八五ページ参照。なお松川七郎氏はTradesmenを職人と訳されている。

(17) ここでペティが「衣」の分化を「梳毛工・縮絨工・染色工・つやだし工・幅だし工」としている点は、マニュ内分業を想起させる面をもっている。これだけではマニュ内分業を提示しているとはいえないが、彼の分業把握が社会的分業の増進→マニュ内分業の生成という想定にあったのではなかろうかと類推される。この点について松川七郎氏は、マニュ内分業をこの段階のペティの中に認めておられる。松川七郎、前掲書、一八二ページ参照。

(18) この点に関連して、ペティは外国貿易の位置を「イングランドについての観察」の中で、「イングランドへ諸物品を輸入する理由」として要点次のようにのべている。――(1)土地の生産性が低いため、(2)生産技術が低く、訓練が少なく、奨励も弱いため、(3)技術改善の実験もなされていないため、(4)あらゆる地方の人々によろこばれる諸物品をもたらすため、(5)それらを再輸出するため、(6)全世界に共通な諸物品（金・銀・真珠・宝石）を貯蓄するため――。このような彼の理由をみてゆくと、彼が外国貿易を自国の生産力の発展に基盤をおきつつ、「富の最上の増進」の問題（金・銀等での貯蓄）をとらえようとしている「余剰利得」＝「富の増進」を貫ぬいた視点をみることができるのではなかろうか。この点について松川七郎氏も言及されている。前掲書、一八五～一八六ページ参照。

(19) 「余剰利得」の概念については、従来、松川七郎氏の見解と渡辺輝雄氏の見解において対立的展開がなされて来ている。その対立の要点は、松川氏が「余剰利得」の生産過程との関係を強調される（松川七郎前掲書一八五ページ等参照）のに対して、渡辺輝雄氏は、金・銀・宝石等での「余剰利得」を富の最上の増進とする点を強調して、「余剰利得」はペティにおける「遅れた古い思想」として評価される点（渡辺輝雄前掲書、一〇九～一二二ページ）である。しかし、われわれは、こうした二氏の見解は、ペティ「余剰利得」概念の一面を強調された把握として不充分な把握であると考える。何故なら問題はまさしくこのように一面化して把握されてゆく二面が実は独自の統一性―結合―をもつことによって彼の「余剰利得」概念が成立しえている点を評価の中心にすえなければならないと考えるからである。